



印度人にびっくり

ーインド(デリー)とニューデリー日本人学校の紹介ー

前ニューデリー日本人学校 教諭
北海道江別市立大麻中学校 教諭 杉原 大樹



はじめに

ナマステ。2007年度より3年間、在外教育施設派遣教員として、ニューデリー日本人学校に勤務させていただきました。デリーに赴任中の3年間で、ここだけでは語りきれないほどの、さまざまな経験をさせていただきました。

またご承知の通り、インドの社会そのものも、その短い間に大きく変貌しました。そして今なお、急速に成長しつつあるであろうことはご想像通りかと思えます。そのようなインドの情報を、いくつかの見出しに沿って、現地に在住していた日本人の目を通してお知らせします。

この拙文が、みなさまのインド(デリー)理解の一助となることを願っています。

インドとデリーの概要

インドの国土は約320万km²で、日本の約9倍です。人口は世界第2位の約12億人で日本の約10倍、総人口の80%以上がヒンドゥ教を信仰しています。

そしてデリーの位置は北緯28度で、奄美大島とほぼ同じです。面積は約1500km²で札幌市の約1.5倍ですが、人口は1500万人を超え、北海道の総人口の約3倍です。

また、インドには非常に多数の言語が存在し、公用語とされているのは **～通勤途中のゴミ捨て場で生ゴミを食べる野良牛と野ブタ～** 18言語です。その中で最も多く話されているのはヒンディ語ですが、地方によって使う言語がまちまちのため、準公用語として広く英語が使われています。



～通勤途中のゴミ捨て場で生ゴミを食べる野良牛と野ブタ～

デリーの政治・経済

デリーはインドの首都であるばかりでなく、州に準ずる行政機構を持っています。

また、政治都市としての色彩が強く、産業発展の側面ではムンバイの後塵を拝している



と言われてきましたが、最近ではビジネスの中心地として、隣接するグルガオン地区やノイダ地区とともに、その存在感を高めています。これらの地域の日系企業数も徐々に増加し、現在では 100 社以上の企業がさまざまな分野で事業活動を展開しています。

一方、急速な経済発展とともにデリーでは、水道、道路、電力、通信、ゴミ・尿尿処理といったインフラの不足と未整備が深刻化しつつあり、政府も対応を急いでいます。

～川沿いのスラムに立ち並ぶ家（あちらこちらに存在する）～

デリーの気候

デリーが暑いことは言うまでもありませんが、ただ暑いだけではなく、一般的に、ホット・ホッター・ホッテストと言われています。

西の砂漠地帯からの乾燥熱風と、北のヒマラヤ山岳地帯からの湿った冷たい風などに影響を受ける内陸性気候のデリーでは、次の 3 つの特徴があります。

① 乾燥期（10 月～ 2 月）

気温は 20 度前後ですが、12 月と 1 月はかなり冷え込み、ヒーターが必要です。

② 暑熱期（3 月～ 7 月）

気温は 45 度を超え、50 度になることもあります。あまりに暑いため、デリー中の蚊と蠅がいなくなります。

③ 雨期（8 月～ 9 月）

気温は若干下がりますが、湿度が上がりますので、不快指数は高まります。9 月には再度気温が 40 度近くに上がり、これをセカンドサマーと呼んでいます。



～スクーターは何人でも乗れるだけ乗る（これは6人乗り）～

現地の教育環境

現在インド政府は、教育、特に底辺の教育を最重要視しており、その結果、インドの底辺層の教育レベルは着実に上がっています。特に初等教育で力を入れているのは英語と算数で、インドを支える IT 産業の基礎として、児童生徒は九九ではなく 20 × 20 まで暗記します。

デリーのインターナショナル校はアメリカ系、イギリス系、ロシア系、ドイツ系、フランス系など数多く揃っており、特にアメリカ系には日本人も数十名程度在籍しています。

インドの教育課程は、初等教育（日本より 1 年早く入学する）5 年間、上級初等教育 3 年間の計 8 年間は義務教育、中等教育 2 年間、上級中等教育 2 年間、大学等の高等教育となっています。約 30 %の進学率と言われている大学は、そのレベルは千差万別であるものの、超一流の工科大学の卒業生には、世界中の一流企業から就職勧誘の声がかかります。

参考までに、ペンティアム・チップやホットメールをつくった人はインド人で、他にも、アメリカにおけるドクターの 38 %、科学者の 12 %、NASA 職員の 36 %、マイクロソフト社職員の 34 %等々、インド人は数多くの企業で大活躍しています。



～現地キンダーガーデンの様子（インドダンスの授業）～

ニューデリー日本人学校の教育

ニューデリー日本人学校は、インド国政府より私立学校としての認可を受け、世界中の日本人学校の中で 3 番目となる、1964 年に開校しました。学校は、ニューデリー中心部より車で 1 時間ほど走った、デリー南部にある、比較的裕福なサラリーマンが多く住む住宅地の中にあります。



～ニューデリー日本人学校と全園児・児童・生徒・職員～

開校以来 42 年間、児童生徒数は 60 名から 80 名前後で推移し、それまでの最高は 1987 年の 99 名でしたが、私が赴任した開校 43 年目の 2007 年、初めて全校児童生徒数が 100 名を超え、帰国直前の 2010 年 3 月段階では、約 180 名が在籍し、以前にも増して元気いっぱいの子どもたちの声が響いていました。ここにも、最近のインド経済の発

展と、それに伴う日本企業参入の実態が見受けられます。

児童生徒は、毎朝 8 時 20 分頃になるとスクールバス（80 %の児童生徒が利用）や自家用車で登校してきます。スクールバスも、私が赴任した 2007 年 4 月段階では 4 台でしたが、児童生徒数の増加に伴って、2009 年度には 10 台となりました。

基本的な 1 週間の流れとしては、毎週月曜日には朝会があり、すべての先生方が持ち回りで話をしたり、委員会活動等の報告をしたりします。毎週水曜日は 4 時間授業で、午後は水泳などいくつかの講座を開いて、運動を楽しみます。そして木曜日 7 時間目は、4 年生以上が参加する委員会とクラブ活動があります。

他には、毎日、放課後活動の時間を設定していて、子どもたちは体育館やグラウンドに残って遊ぶことができます。これは、地域の公園等ではなかなか遊ぶことができないため、運動不足を少しでも解消させようという願いが込められて行われています。



～日々の通勤途中の車窓から（サファリパークではない）～

国際理解教育

ニューデリー日本人学校と現地校との間で、1 年間に数回程度、学校全体としての交流活動を実施する他、各学年単位などで 1 年に 5 回から 15 回程度、学習発表会などの発表の場に向けての交流を重ねています。

全体としての交流では、現地校に 1 日体験入学をし、インドダンス、ヨガなどの授業に参加したり、ヒンディ語やインド数学を学んだりするなど、各学年の発達段階に応じたさまざまな学習内容を経験することで、多様な考え方や価値観が身につくよう設定されています。



～現地校との交流（七夕集会）～

その他、現地校をはじめとする国際学校とのスポーツ交流も実施されています。現地校 2 校の他に、冒頭でも述べたインターナショナル校（イギリス系・ロシア系）を招待し、サッカー（男子）とバスケットボール（女子）でスポーツ交流（国際学校球技大会）を実施しています。

また、「ようこそ JAPAN DAY」や「七夕集会」というタイトルの下、現地校を半日日程で受け入れ、七夕についての説明をしたり、短冊づくりや折

り紙、日本の遊びや茶道などの経験の場を提供したり、太鼓やお囃子などを発表することで、日本文化を発信する機会もつくっています。

水泳授業・水泳大会

ニューデリー日本人学校の体育授業は、夏の猛暑の関係で、4月から9月は週3時間のうちの1時間を陸体育、残りの2時間は水泳授業を実施しています。1年間（半年間）の水泳授業の総まとめとして、9月中旬に校内水泳大会を開催し、全校児童生徒が2種目以上に参加する盛大な大会が企画されます。この水泳大会に向けては、通常の水泳授業の他に、強化練習を設定したり、放課後活動の中に水泳講座を設けたりすることで、1人ひとりがそれぞれの実力や体力と相談しながら、自分のペースで練習に励むことができます。

新入生や転入生の中には、あまり水泳が得意でなく、実際には泳げないという子も多々



～水泳の様子（授業の他にも放課後活動や強化練習がある）～

いますが、ニューデリー日本人学校と水泳とは切っても切り離せない関係にあることから、数か月もすると驚くほど泳げるようになり、9月の大会では全員が2種目以上、3年生以上は3種目以上に出場するまで上達します。また、4年生の半数程度、5年生になると全員がバタフライで泳げるようになります。これには本当に驚きます。

ちなみに、こちらに来るまで泳ぐことができなかつた私でさえ、渡印2年目には泳げるようになり、水泳大会のリレーに教員チームの一員として参加するまでになりました。

運動会

ニューデリー日本人学校の運動会は毎年11月、学校のグラウンドを会場に「ニューデリー日本人学校・デリー日本人会運動会」と称して行われます。当日は幼稚園を含めた学校の部と、日本人会の部の運動会が合同で開催されるため、子どもたちの競技の合間合間に、所属企業単位で分かれた、グループごとの対抗競技が入るのが特徴となっています。

例年、さわやかな秋晴れの空の下、大人を含め約350名が参加して白熱し



～運動会の応援合戦～

た競技が繰り広げられます。子どもたちは当日に向けて、2週間前から特別日課を組み、いろいろな競技や演技の練習を重ねます。しかし「涼しくなった」とは言っても、日中は暑い日も多く、朝と晩の寒暖差が激しいため、体調を崩す子どもが続出します。

競技種目は、徒競走、綱引き、リレーなど、一般的な種目が中心ですが、それら以外にもインドならではの種目「インディアン・ダンス」があります。これは恒例の種目で、幼稚園児を含む全校児童生徒が民族衣装や飾りを身につけて踊ります。

英会話授業

ニューデリー日本人学校では小学部3年生までは週1時間、4年生以上は週2時間、英会話授業を取り入れています。具体的には、各学年の授業を最大6コースに分けて設定し、児童生徒の能力や希望に合わせたコースを編成しています。

授業は、扱う内容を学校行事や国際交流行事とリンクさせることによりタイムリーな話題を扱ったり、どの時間にも声を出させる活動を多く取り入れるよう工夫したりしながら展開されています。

どのコースも講師はすべて外国人を採用しているので、子どもたちは毎時間、ネイティブの先生と楽しくやり取りしながら、英会話（英語）の実力を身につけています。

そもそも英会話とは、英語を用いて表現することで、そして表現とは、自分の意思を相手に伝えることであり、相手の意思を受け止め、理解する力だと思います。世界に通用する言語としての英語は、今や不動の位置を占めたかのごとく見えますが、しかし、英語以外にも、世界に通用する言語が多く存在しているのも事実です。日本語もまた、日本の経済力を反映して、コミュニケーションの手段として日々伸長していると言えるでしょう。



～手前はインダス・奥に見えるのは雪をかぶったヒマラヤ（8月）～



～英会話授業の様子（外国人講師と少人数で）～

しかし「されど英語力」です。日本の子どもたちが、日本語で思考するという回路を大事にしながらも、日本人としての意見を発表していく時に、英語力は大きな「助っ人」となるに違いありません。英語力をつけるということは、表現力を飛躍させる道であり「情報を収集する力」となるでしょう。

しかし、日常生活で英語を必要としない日本においては、基本的には小学校段階で英語教育に力を注ぐ時間

があるなら、母国語である国語に力を注ぐ方が望ましいと感じています。しっかりとした母国語の定着を図った後に、初めて外国語を入れていくのが正しいのではないのでしょうか。これが、英語が日常的に使われている国において、実際に小学校で英会話（英語）の授業を取り入れている状況を目の当たりにした、私なりの率直な感想です。

現地理解体験学習



～現地理解体験学習でラクダに乗る子どもたち～

につくって試食をしたり、「シタール」や「タブラー」などのインド楽器の演奏を聴いたり、実際に音を出してみたりします。また「テラコッタ」というインドの素焼き作品をつくったりもします。

体験ブースでは、象やラクダなど、インドに馴染みのある動物に乗ったり、ヘビつかいやサルまわしを招いてショーを見学したりします。他にも、街ではたくさん走っているものの、普段はなかなか乗ることができない3輪タクシー「オートリキシャ」の乗車体験をしたりもします。

おわりに

今回、心を込めて「報告書」を書かせていただきました。帰国してから約半年、改めてこの3年間を振り返るに格好の機会をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

たくさんのアドバイスと激励をいただいで北海道を発ち、今の自分の感情が期待なのか不安なのかわからないままデリーに降り立った日のことを懐かしく感じます。

帰国して半年経った今、改めて振り

1年に1度、「ナマステ INDIA DAY」というタイトルの下、現地理解体験学習を設定し、インドにかかわるさまざまな文化に触れる活動を通して、インドへの関心を高め、インド理解をさらに深めようとする企画があります。

内容的には、ワークショップブースと体験ブースの2つに分け、児童生徒は約3時間ほど、さまざまなブースを回ります。

ワークショップブースでは「サモサ」や「パコラ」などのインド料理を実際



～街中を走るオートリキシャ（10人以上は乗っている）～

返る 3 年間は、「たくさん経験した」
だけではもったいな過ぎるほど、spicy
で dangerous なすさまじい日々をすご
させていただきました。

インドという国は（他の国もそう
でしょうが）、このような原稿を読ん
でも、何かしらの画を見ても、どん
なに詳しい話を聞いても、なかなか
感じ取ることのできない国だと思
います。実際に現場に立ち、空気を吸
い、画を目の当たりにした状態で
おいを嗅がなければ感じ取れない国
だったと、私は理解しています。



～庶民の移動手段・公共バス（しがみついた場合はタダ?）～

かつて「インド人もびっくり」という言葉がありましたが、私はインドで生活させて
いただくうちに、「インド人にびっくり」するようになりました。

約 12 億人の人口のうち、8 億人が 1 日 2 ドル以下で生活し、さらにそのうちの 4 億人は 1
日 1 ドル以下で生活しています。また、3 歳以下の子どもたちのうち、46 %が栄養失調の
状態にあるという厳しい状況もあります。人間と動物、食べ物とゴミや糞尿、着る物や住
居に至るまで、あらゆるものの境界線が極めて曖昧な中、それでもなおエネルギーに
生き抜いているインド人に、私は非常に驚いています。

見方によっては、日本に住む私たちからするとまったく理解しがたい光景が、当然のよ
うに、そしてあたりまえのように、日々目の前で繰り広げられています。こちらの人々は、
生活する上で必要な物すべてと絡み合い、共存し、受け入れているのだと私は思います。

そのような、ある意味違った「豊かさ」をもつインド。みなさまも、もしもインドに行
かれましたなら、どんどん深みにはまっていくこと請け合いです。何も心配なさらず、イ
ンド人になったつもりで「印度旅行」を計画されてはいかがでしょうか。そしてその際
には、是非ともご一報いただきたいと思います。これまでのご恩返しも含めまして、適切
なアドバイスや旅行代理店の斡旋など、懇切丁寧に対応させていただきます。



～夕方になると野良牛たちは列をなして帰路につく～

最後になりましたが、3 年間におよ
ぶ貴重な研修の機会を与えてくださ
った各関係機関のみなさま、多大な激励
とサポートをくださった石狩の仲間、3
年間共に過ごさせていただいた同期派
遣の榊浩明氏（日高）やインド人の友
人、お世話になったスタッフのみなさ
まに感謝申し上げ、そして何より、共
に手を取り合いながら 3 年間を乗り切
った私の家族に改めて感謝し、帰国の
報告とさせていただきます。

बहुतधन्यवाद (バハットダンニヤワド)

नमस्ते

बहुतधन्यवाद (बाहट्टडानन्यावर्ड)

नमस्ते नमस्ते

नमस्

नमस्ते

बहुतधन्यवाद

बाहट्टडानन्यावर्ड